創造神話と新創造論

統一思想研究院　大谷明史

人類は古来、数多くの神話を生み出してきた。そこには「天地はどのように創造されたか」という、世界の始まりにたいする興味深い物語がある。さらにユダヤ・キリスト教の創世記の他にも、世界の諸宗教においても、天地創造の記述がある。

これらの神話や宗教の天地創造の物語は、科学時代の今日、荒唐無稽なものと考えられたり、単なるおとぎ話にすぎないと見られる場合が多い。しかし統一思想の新創造論の観点から、これらの創造神話を解釈すれば、決して荒唐無稽なものでなく、またおとぎ話でもないことが明らかになる。すなわち新創造論を通じて、創造神話を現代に生かそうとするのである。そうすることによって、他方では、新創造論の真理性を高めることが期待されるのである。

（一）原人神話

原初に原人（または原初の神）が存在し、原人が死んで、あるいは生贄になり、その身体から人間、動物、植物、天と地が生じたという神話が世界各地に見られる。その中で代表的なものをあげてみよう。

（１）巨人プルシャ（古代インド）

C.S.リトルトンの『神話』はインドの巨人プルシアの神話を次のように説明している。[1] インドの古代の賛歌『リグ・ヴェーダ』（Rig Veda）によれば、神々は原初に巨大な原人プルシャ（primordial man, Purusha）を生贄として、その身体から世界を造ったという。プルシャの身体がばらばらにされて、頭から天、足から地、へそから大気、耳から方位が生じた。心臓から月、目から太陽、口から神々の王であるインドラ神（Indra）と、火の神であるアグニ神（Agni）、呼吸から風の神ヴェーユ（Vayu）が生じた。人間の四つの階級もプルシャから生じた。すなわち、プルシャの口からバラモン（brahmin, 祭司階級）、両腕からクシャトリア（kshatriya, 王族：戦士階級）、両腿からヴァイシャ（vaisha, 農民と職人の庶民階級）、両足からシュードラ（shudra, 奴隷階級）が生じたのであった。

（２）巨人盤古（古代中国）

天と地ができる以前は、混沌としたモヤのような状態であった。その混沌の中から盤古（Pan Gu）が生まれた。盤古はどんどん成長して大巨人になったが、

やがて死を迎えた。死んだ盤古は万物の元になった。その息は風となり、声は雷に、左の眼は太陽に、右の眼は月になった。髪やひげは星となり、汗は雨になった。手足は地の四本の柱となり、体は五つの名山となった。血は川に、肉は土に、皮や毛は草木に、歯や骨は金属や石になった。精液と骨髄は真珠とひすいになった。そして身体に寄生していた虫たちが人間になったという。(2)

（３）巨人イミル（北欧神話）

巨人イミル（Ymir）は世界最古の存在であり、神々とこれに敵対する巨人一族との共通の祖先だったとされている。彼はオーディン（Odin）、ヴィリ（Vili）、ヴェ（Ve）という三柱の兄弟の神によって殺され、三神はイミルの死体から世界を造った。イミルの身体の肉は大地となり、血は海となり、骨は岩となり、歯とくだけた骨は石や砂になり、髪の毛は樹木となった。頭蓋骨は空となって、大地の上に置かれた。そして脳髄は空の雲になったという。(3)

（４）原初の女神ティアマト（バビロニア）

救世主とされる太陽の子、マルドゥク神（Marduk）は塩水の海の女神ティアマト（Tiamat）を殺して、彼女を二つに裂いた。そしてティアマトの身体の上半分から星を伴った天空が創られ、下半分から植物と動物を備えた大地が創られた。ティアマトの唾液から雨雲がつくられ、目からティグリス、ユーフラテス川がつくられ、胸から山脈がつくられ、山から清水が流れ落ちた。ティアマト軍の司令官であったキング（Qingu）は捕らわれの身となったが、やがて殺されて、その血から人間が創られたという。

（５）イザナギの神（日本神話）

イザナギ（Izanagi）とイザナミ（Izanami）の男女神は夫婦の交わりによって八つの島からなる日本列島を生んだ。ついで山の神、海の神、岩、土、木、風、五穀などの数多くの神々を生んだが、最後に火の神を生んだとき、イザナミは陰部を焼かれて死に、黄泉（Yomi）の国へ下った。黄泉の国へ妻をたずねて行ったイザナギが、「入ってはならない」といわれた部屋に入ってみると、そこには全身にうじの湧いた醜い妻の身体があった。イザナギはあわてて逃げ出した。イザナギが黄泉の国から逃げ帰り、みそぎをした時、彼の左の眼から太陽神のアマテラス（Amaterasu）が、右の眼から月神のツキヨミ（Tsukiyomi）が、鼻からは暴風神的性格が著しいスサノオ（Susano）が生まれた。この神話は原人から世界が生じたという神話の変形したものであるといえよう。

（６）原人神話と新創造論

原人神話によれば、原初に原人（あるいは原初の神）が存在し、その原人や原初の神がいけにえとなり、その身体から、天と地、万物が生じたという。しかし、これは象徴的な物語と見るべきである。

新創造論によれば、神は始めに人間始祖（アダム・エバ）の構想を立てられ、その構想をモデルにして、人類、動物、植物、鉱物、天体を構想されたのである。したがって原人とは、万物の原型となった人間始祖を意味していると見ることができる。実際に原人が殺されて、ばらばらにされたのではなく、原人として表現されている人間始祖の姿（構想、設計図）を見本として、それを捨象し、変形しながら、万物を構想されたという意味に理解できる。したがって原人の体からの創造神話は新創造論に通じているといえよう。人類始祖アダム・エバの構想にもとづいて万物が構想されたことを図で表すと図１のようになる。

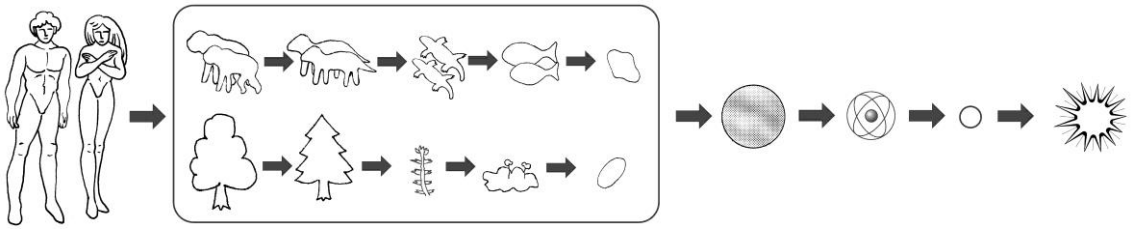

図１．人間始祖アダム・エバを標本として構想された宇宙と万物

（二）宇宙卵の神話

世界が一個の卵から創られたという神話が、世界各地に見出される。これは何を意味するのであろうか。主要なものを取りあげてみよう。

（１）ユダヤ・キリスト教の天地創造神話

創世記一章には、「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」とあるが、この文章の最後に用いられているヘブライ語の表現は、文字通り訳せば、「神の霊が巨大な鳥の形を取って、原初の大洋の上で卵を暖めていた」ことを意味すると言われる。(4)

（２）ヒンドゥー教の宇宙創造神話

D.リーミング、M.リーミングの『創造神話の事典』は、インドの創造神話について、次のように説明している。(5) シャタパタ・ブラーフマナ（Satapatha

Brahmana）に出てくる神話によれば、世界創造以前には、ただ原初の海があった。海は命を生むことを欲したので、強く望んだところ、十分に暖かくなって黄金の卵が生まれた。この卵は一年間水の上を漂っていたが、一年後、その中からプラジャーパティ神（Prajapati）が生まれた。プラジャーパティは、卵の殻を破って出た後、その殻の上にもう一年間ほどいて、それから口を開いた。その口から出た言葉が大地となった。その次の言葉が天となった。また別のいろいろな言葉が季節になった。

最古のウパニシャッドであるチャンドグヤ・ウパニシャッド（Chandogya Upanishad）にも、卵の物語があるが、同書ではプラジャーパティは創造神ブラフマー（Brahma）となっている。ブラフマー（梵天）は最初に海を創り、その中に種子を一粒まいた。その種子はやがて卵に成長した。それをブラフマーは二つに割った。割られた卵の金の半分から天空が、銀の半分から大地が生じた。ついであらゆる森羅万象が創られた。

（３）中国の盤古神話

D.リーミング、M.リーミングの『創造神話の事典』は中国の宇宙卵からの創造を次のように説明している。(6) 初めに巨大な卵があり、中には混沌があった。それは陰と陽――男女、静と動、冷と熱、湿と乾の混ざりあったものであった。この陰陽の中に盤古がいた。やがて卵の中から盤古が現れた。盤古が大きくなるにつれて天と地が次第に分れるようになった。清く、明るい部分は天となり、暗い濁った部分は地となった。そして 18,000 年たつと、天と地は遠く隔たり、現在のようになった。

（４）ギリシアの宇宙卵神話

C.S.リトルトンの『神話』はギリシアの宇宙卵神話を次のように説明している。(7) ヘシオドス（Hesiod）の著作にあらわれる創造神話によれば、女性神カオス（Chaos）が海を造り、その波の上で踊った。踊りから生じた風によって物質ができた。カオスはその物質から巨大な蛇を造った。カオスは鳩の姿になって巨大な卵を産み、蛇がそれを孵化した。この原初の卵から宇宙の万物が生じたのである。

オルフェウス教（Orphism）の創造神話によれば、時の神クロノスは銀の宇宙卵を造った。その卵から最初の神パネス（Phanes）が生まれた。パネスは自分の体から娘のニュクス（Nyx, 夜）を造り、そしてニュクスと交わり、天地のすべてのものを造ったのである。

（５）エジプトの宇宙卵神話

C.S.リトルトンの『神話』はエジプトの宇宙卵神話について次のように説明している。[8] ヘルモポリス（Hermopolis）の神話によれば、世界が存在する前、原初の海の中に四組の男性神と女性神のペア（八柱の神, Ogdoad）があり、男性神と女性神の争いによって、原初の盛り土ができた。原初の盛り土の中に宇宙卵が含まれていた。卵が割れると、盛り土は「炎の島」となり、そこからうまれたばかりの太陽神が空に上って天に座した。宇宙の誕生を大激変とするヘルモポリス神話は現代のビッグバン理論をほうふつとさせる。

他方、ヘリオポリス（Heliopolis）神話によれば、原初にベヌ（benu）と呼ばれる聖なる鳥の形でアトゥム神（Atum）が現れた。鳥が海の上で鳴くことによって、ゆらぎが生じて創造が始った。アメン神（Amun）が海（Nun, ヌン）の上で、がちょうのように鳴くことにより、宇宙的な激動が生じたという説もある。鳥が原初の盛り土にとまって卵を生んだ。卵がかえると、そこに太陽神が現れた。ギリシアのヘロドトス（Herodotus）はその鳥を火の鳥（phoenix, フェニックス）と記した。

（６）フィンランドの卵神話

フィンランドの叙事詩「カレワラ」（Kalevala）の中に創造の物語がある。[9] 初めに、原始の海と空があった。空の娘イルマタル（Ilmatar）が海上を漂っていた時、一羽の小鴨が飛んできてイルマタルの膝に金の卵六つと鉄の卵一つを産んだ。イルマタルの膝から落ちた卵は水中に落ち、風にゆられ、波にもまれて割れてしまった。卵の殻の下は大地となり、上の部分は大空となり、白身は月と星となり、黄身は太陽となった。やがてイルマタルは、最初の人間であるパイナモイネン（Vainamoinen）を生んだ。

（７）韓国の卵生神話

東扶余の金蛙（キムファ）王の時代であった。王はある日、川のほとりで世にも美しい娘、柳花（ユファ）に出会った。柳花は天帝の孫を身ごもっていた。王が柳花を連れて王宮に戻ると、柳花が大きな卵を生んだ。やがて卵がかえり、なかからひとりの男の子が現れた。男の子は朱蒙（チュモン）と呼ばれるようになった。

やがて朱蒙の才を恐れた金蛙王の王子たちから生命をねらわれるようになり、朱蒙は逃亡した。朱蒙一行は淹水（ウォムス）に至り、追いつめられたが、魚とすっぽんが

一列になって橋を作り、無事に川をわたった。朱蒙は南下して高句麗を興し、高句麗の始祖となった。朱蒙は東明王と称された。朱蒙（東明王）の子、温祚（オンジョ）が百済を興した。したがって百済は高句麗の弟国のような形になる。

新羅の始祖となった朴赫居世（パクヒョクォセ）も卵から生まれたという。現在の慶州を拠点としていた斯盧（サロ）国の六村の村長が、ある時、「君主をお遣わし下さい」と天帝に祈願した。すると一条の光が天地を照らした。そこには一頭の白馬が紫色にかがやく大卵の前で跪いていた。その卵から生まれたのが朴赫居世であり、彼は新羅の王となった。新羅の第四代の王、脱解（ダヘ）も船にのせられて流された卵から生まれたという。

加羅（カラ）（伽耶（カヤ））の王となった首露（スロ）も、天から降りてきた黄金色の六つの卵のなかの一つから生まれたといわれている。このように、韓国では卵から国の始祖が生まれたという神話が多く語られているのである。

（８）日本の神話

『日本書紀』には、天地は鶏の卵のような状態から生まれたと次のように記されている。

> いにしえに天地はまだ分かれておらず、陰と陽の区別もなかった。混沌として鶏の卵のようであったが、まだ境目がはっきりとしておらず、その中には植物の芽のような命の始まりがあった。この混沌の内、澄んだ部分が薄くたなびいていって天となり、重く濁った部分が滞って地となった。精妙な部分はすぐに合わさって一つとなりやすかったが、重く濁った部分はなかなか固まらなかった。ゆえに、天が先にできて、地はその後にできた。そしてその後に、神々がその中に生まれたのである。(10)

（９）現代の宇宙卵理論――ビッグバン理論――

現代科学の宇宙観によれば、今から 135～150 億年前に、宇宙は一点の爆発から生まれ、急激な膨張インフレーションを伴って、急速に広がっていった。そこから素粒子、原子、天体が生まれ、現在のような広大な宇宙になったというのである。これは宇宙卵が爆発的に孵化したものと見ることができよう。

（１０）宇宙卵と新創造論

新創造論によれば、神は始めにロゴス（言）を形成され、次にロゴスに従って被造世界を創造された。ロゴスとは、被造世界に対する神の構想または設計図であるが、ロゴスの形成においては、人間の構想をモデルにして、高級な生物→低級な生物→天体→原子→素粒子→光というように、下向的に構想がなされた。ところが被造世界の創造においては、その逆に光から始まり、人間を目指していったのである。したがって宇宙はビッグバンから始まり、人間の住み家としての地球を形成し、やがて人間が誕生するようになっていたのである。大昔の神話においてはそれを宇宙卵から宇宙と人間が生まれたと捉えていたのである。

宇宙卵の中にはロゴスが宿っていた。そしてロゴスに導かれて世界が創造されたのであった。ロゴスすなわち神の構想は、人間（アダム・エバ）を目標とするものであり、人間の生活環境として万物を準備するものであった。つまり宇宙卵の中に人間と万物の構想が入っていたのである。したがって卵が割れて、その中から天と地、人間、動物、植物が一度にぞろぞろと飛び出してきたというわけではない。宇宙卵の中に入っていた構想に従って、光→素粒子→原子→天体→低級な生物→高級な生物→人間という順序で、時間をかけながら形成されてきたのである。そのような立場から見れば、卵神話も、単なるおとぎ話ではなく、現代科学の立場からも理解できるのである。

このように、神の構想（ロゴス）に従いながら、ビッグバンから始まった創造を古代の神話は宇宙卵の孵化として捉えたのであった。ロゴスに従い、ビッグバンから始まった創造を図で表すと図２のようになる。

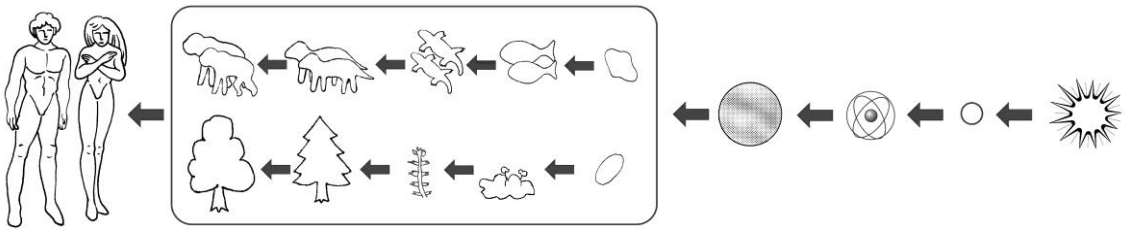

図２．ロゴスに従い、ビッグバンから始まった創造

（三）男女神の交合による天地創造

神は男性と女性の両性をそなえておられる。したがって神の形に似せて男と女が創造された。あるいは男女神の結合によって万象が生まれたというような

神話が世界中でみられる。

（１）ユダヤ教、キリスト教、イスラム教のアダムとエバ

神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された」（創世記 1:27）とあるように、神は一人の男性と一人の女性を合わせた方であるという結論になる。その男女神としての神が天地を創造されたのである。これはユダヤ教、キリスト教、イスラム教に共通した見解である。

（２）ヒンドゥー教の男女神

『リグ・ヴェーダ』（Rig Veda）によれば、天の男性神ディアウス（Dyaus）と大地の女性神プリティヴィー（Prithivi）が合体した天地両神ディヤーヴァー・プリティヴィーが万物の父母であり、その維持者であるという。ディアウスとプリティヴィーから生まれたのが『ヴェーダ』の神々の王インドラ（Indra, 帝釈天）である。ヒンドゥー・タントリズム（Hindu Tantrism）によれば、男性神シヴァ（Shiva）とパールヴァティー妃（Parvati）との性的合一による宇宙創成が説かれている。パールヴァティーは女性原理であるシャクティ（性力、Shakti）を象徴する女神である。

（３）中国の神話――伏羲と女媧――

龍の女神である女媧（じょか）（Nü Wa）は人類を創造した神とも考えられていたが、後に女媧は伏羲（ふっき）（Fu Xi）と尾を絡ませた一対の神とされた。女媧と伏羲は始祖の神であるとともに、天地を創造した神であった。大洪水を生きのびた伏羲と女媧の兄妹（あるいは弟姉）が夫婦となって人類の始祖となるという伝承もある。

宇宙の根源である太極から陰陽の二気が生じ、二気から四象が生じ、四象から八卦が生じるというようにして、宇宙は創成された。これも宇宙の根源が男性と女性の二性を兼ね備えた存在であり、その二性（二気）によって宇宙は生まれたということを示している。

（４）日本の神話――イザナギとイザナミ

天と地が始ったとき、高天原に天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）を中心とする５神の別天神（ことあまつかみ）と２神の根源神が生まれた。これらの神々は姿を現さず、男女の性別がなかった。

次に生まれた１０神は男女ペアの、姿を現す神であり、最後に生まれたのがイザナギの神、イザナミの神であった。イザナギとイザナミが天の浮橋に立って、天(あめ)の沼矛(ぬぼこ)をかき回すとオノゴロ島となった。オノゴロ島に降りた二神が男女として交わると大八島の国（日本）が生まれた。

（５）男女神による天地創造と新創造論

神は陽性と陰性の二性性相の中和的主体である。したがって神は男性神と女性神が一つになった存在であると見ることができる。神はロゴス（言）によって被造世界を創造された。ロゴスは神の被造世界に対する構想、設計図であり、天地創造のシナリオであるが、ロゴスは神の陽陰の二性性相に似ていた。したがって男と女、雄と雌、おしべとめしべ、陽イオンと陰イオンのペアシステムの世界が創造されたのである。これは男性神と女性神の一体となっている神が、その二性の授受作用によって被造世界をつくられたと見ることができよう。

（四）回転による創造

垂直に立てた柱を中心として、ガスや水を攪拌しながら世界が創造されたという神話がある。また柱を立ててその周囲を人々が踊りながら回るという風習も世界各地で見られる。

（１）古代インドの乳海攪拌

遠い昔、ヴィシュヌ神（Vishnu）が神々に、マンダラ山（Mandara）を攪拌の棒とし、ヴァースキ龍（Vasuki）を綱にして乳海をかき混ぜるように命じた。ヴィシュヌ自身も巨大な亀に姿を変えて回転の軸受けとなった。この攪拌によって、月と太陽、女神ラクシュミー（Lakshmi）、白い象などが現れた。最後に、神々の侍医ダヌヴァンタリ（Dhanwantari）が不死の霊薬を奪ったが、ヴィシュヌがそれを取り返し、神々はそれを飲んで勢力を回復した。

（２）巨大な火柱（リンガ）の出現

『リンガ・プラーナ』はシヴァのリンガについて次のように伝えている。(11) ヴィシュヌとブラフマーが自分こそ最も偉大な神だと言い合っていると、水中から巨大な火柱が出現した。ヴィシュヌは水に潜り、ブラフマーは空に飛んで火柱の先端を確かめようとしたが、見つけることができずに戻ってくるとシヴァが姿を現した。この火柱はシヴァの宇宙的形相であり、その現生的なシンボルがリンガであるという。リンガにたとえられた火柱とは、宇宙創造の柱であるといえよう。

（３）天の沼矛（日本の神話）天之御中主神を中心とした五つの別天神がイザナギとイザナミの二神に天(あめ)の沼矛(ぬぼこ)を授けた。イザナギとイザナミが天(あめ)の浮橋(うきはし)に立って、橋の上からはるか下に長い沼矛を下して、ぐるぐるとかき回すと、矛の先からポタポタと塩がしたたり落ちた。落ちた塩がかさなり積って、オノゴロ島ができた。

（４）天の御柱（日本の神話）

イザナギとイザナミの神は、オノゴロ島の真中に天(あめ)の御柱(みはしら)を立て、この御柱のまわりを回って、夫婦の交わりをして国生みのわざをなした。淡路島を始めとして八つの島が生まれた。かくして大八島の国である日本列島が誕生したのであった。

（５）おんばしら

日本には、諏訪大社のおんばしらがある。山から切り出した木を落として、神社に垂直に立てる行事である。このような日本のおんばしらに似た、柱立ての祭は世界の各地において見られる。(12) アジアでは、ネパールカトマンズ地方の「インドラ・ジャートラの柱立て」、インド・アッサム地方の「アンダミ・ナガ族の扉曳き祭」、ミャンマー、赤カレン族の「柱立て祭」、タイ西北部、ラフ族の村の広場に立てられる「新年の木」、中国チベット自治区で宇宙のヘソと言われるカイラス山（6638 メートル）のふもとに立てられる「聖なる柱」。ヨーロッパでは、スウェーデン、キルナの「ネップランドの夏至の柱」、イギリス、ケント州の「五月の柱（メイポール）」、ドイツの「オクトーバーフェスト」。中米ではメキシコ、パパンドラの「フライング・インディアン」。いずれも、柱（一本）を立て、神や精霊との交歓の手段にするものという。

イギリスのメイポールとは、五月一日のメーデーに、教会や町の広場に柱を建て、その先端に緑の葉を結び、結びつけたひもを手に持って、その周囲をまわりながら踊る風習である。

日本画家の鳥居礼は、回転する柱が日本文化の奥にある宇宙創成の型であると次のように述べている。

> 始原神の息から宇宙大の壷ができ、そこに回転する柱が生じ、その柱の中からさらに左右に回転するヲ（＋）とメ（－）が生じた。ヲは天となりメは地となった。さらにヲ・メは固まって日月となった。これが本来の宇宙創成の型であり、日本文化の奥底には、これらの要素が何らかの形で眠っている。(13)

（６）現代科学の宇宙像

宇宙誕生 10 億年後、光る物質が集って、雲をつくり、雲から生まれた原始の星は、群れをつくり銀河を形成した。クェーサーは当時の銀河の活発な中心核であるといわれが、クェーサーはビームを中心として回転している。星の死である超新星の爆発の跡に残されるのがパルサーと呼ばれる中性子星である。X 線ビームを中心として高速で回転している。銀河においても、中心核にあるブラックホールは物質をジェットで宇宙空間に吐き出すエンジンとして働いており、中心から噴出するジェット流を中心軸としてガス雲が高速で回転している。

このように現代科学の宇宙像から見て、星や星の集団である銀河は、中心軸であるビームの周りを回転しながら誕生し、存在し、死を迎えているのである。

（７）宇宙創造における回転と新創造論

神の宇宙創造は創造の原理である天道によって行われ、宇宙は天道によって運行している。主体と対象が中心軸を中心として円満な授受作用を行い、円環運動を行いながら、存続し、発展しているというのがその基本的な法則である。したがって宇宙の創造も、銀河の運行も、星の最後も、中心軸を中心として回転しながら営まれているのである。人間においては、男と女が縦的な真の愛（神の愛）の軸を中心として愛しあうとき、真なる夫婦となるのであり、個人においては、心の軸を中心として体が回転することにより、真なる人格を形成するのである。神話においても、そのような神の創造の原理を表現していたのである。

（五）言による創造

神の言によって世界が創造されたという聖典や神話が世界各地において見られる。

（１）ロゴスによる創造（キリスト教）

ヨハネ福音書に「始めに言があった。言は神と共にあった。・・・・・・すべてのものは、これによってできた」とあるように、キリスト教では、神が言（ロゴス）によって世界を創造したのである。

（２）「かくあれ」の言で創造（イスラム教）

次のような『コーラン』の聖句にあるように、イスラム教では、神の「かくあれ」という言によって、すべては現れたのである。

「天地の造り主。ご命令をくだしたもうときは、ただ、「かくあれ」との言で、

すべてその通りになる」（コーラン 2:117）。
「もしこのお方があることをきめたもうなら、ただ、「あれ」と一言発せられるだけで成就する」（コーラン 40:68）。

（３）創造神プタハの言による創造（エジプト）
メンフィス（Memphis）の人々はプタハ（Ptah）を世界の創造主であると考えた。プタハはすべてのものを思考と言によって創ったのである。彼の心臓から出る思考と舌から出る言によって、すべてのものは現実のものとなったのである。

（４）トートによる創造（エジプト）
トート（Thoth）は全エジプトの最高神ラー（Re）の代理者であるが、ヘルモポリス（Hermopolis）の神話によれば、トートは宇宙を創造した神とされている。彼は原初の宇宙卵としてみずからを創造し、すい蓮の上に出現した。トートが言葉を発すると「それらの言葉は存在を身にまとった」。すなわち、言葉によって万物を創造したのである。

（５）マヤ神話の創造論
原初、空と海が広がる中、テペウ（Tepeu）と「羽毛の蛇」のグクマッツ（Gucumatz）しか存在しなかった。空っぽの空間に何かができればいいと彼らが考えると、実際に何かが現れた。「大地あれ」と言うと大地ができ、「山」を思うと山が現れ、「木よ」と言うと木が生まれた。こうして創造は続いた。[14]

（６）天つ神の言による創造（日本神話）天之御中主神を中心とする五つの天つ神の言がイザナギ、イザナミの神に与えられた。すなわち「この漂っている国土をよく整えて、作り固めよ」と言われて、彼らに天の沼矛を授けられた。イザナギ、イザナミの神はその言に従って、国造りを行った。それが大八島と呼ばれる日本列島である。

（７）新創造論の「創造の二段構造」
新創造論によれば、始めにロゴス（言）が形成され、次にロゴス（言）に従って被造世界が創造された。ロゴスの形成は下向性であった。すなわち、神は人間始祖アダム・エバの構想を最初に立てられ、それをモデルにして、高級な生物から低級な生物、そして天体、原子、素粒子、光という順序で世界を構想された。次にロゴスに従って被造世界が創造されたのであるが、それはロゴスの形成とは逆の順序で上向的に、光から始って、最後に人間が造られたのであ

る。このように、神は言によって世界を創造されたのである。

（六）原初の質料

無から創造がなされたという創造神話があるが、それはエクス・二ヒロ（ex nihilo）またはデ・ノヴォ（de novo）型創造と呼ばれ、特に一神教の宗教に顕著に見られる。その他に、原初に水（海）や土（泥）があったという神話もある。

（１）キリスト教の「無からの創造」

キリスト教における「無からの創造」はアウグスティヌスによって確立された。神は無から質料を創造し、その質料をもとにして世界を創造した。すなわち、全能なる神は、なんの材料もなく、どんな手段もつかわずに宇宙を創造したのである。

（２）イスラム教の「無からの創造」

「彼ら［人間］は無から造られたではないか」（52:35）とあるように、『コーラン』は「無から」の創造を示している。

（３）仏教における世の始め

仏教では、世界の創造に関してはあまり関心がもたれていないが、初期のインド仏教の経典は、この世の終わりと新しい世の創造について語っている。そこでは創造者にあたる存在はない。初めに、すべては水と闇に覆われていた。長い間、日も月も星もなく、季節の移り変わりもなく、生き物も人もいなかった。熱い乳が次第に冷めて表面に皮ができるように、水の上に地ができた。そして肉体をもつ者が現れ、日と月と星が現れ、男と女の両性ができたという。(15)

（４）土や原初の海（水）からの創造

原初の海からの創造も、多くの創造神話に共通して見られる主題である。また土から造られたという説も見られる。そして超越神が動物（あひる、亀など）を原初の海の中へ潜らせ、水底から採った泥土で創造されたという潜水型の創造神話もある。(16)

（５）現代科学の「無からの宇宙創生論」

アレクサンダー・ビレンキンは「無からの宇宙創生論」を発表した。ある時、突然、時間も空間もない「無」から、素粒子より小さい閉じた宇宙が、エネルギーの壁をトンネルのようにくぐり抜けて誕生したという。ここでビレンキン

のいう「無」とは、何もない無ではなくて、「何かに満ちている無」、「とてつもない力を背後に秘めた無」であり、「真空のエネルギー」を秘めているのである。

（６）新創造論から見た無からの創造

神は何もないところから被造世界を創造された。したがって被造世界は正に無から創造されたのである。しかし神には世界を生みだすエネルギーが備わっているのであり、そのエネルギー（前エネルギーという）によって力と物質が生じたのである。そういう意味では、全くの無からの創造ではない。

現代宇宙論のいう「真空のエネルギー」とは「前エネルギー」であるといえよう。神のエネルギーである前エネルギーからエネルギーが生じ、さらにエネルギーから素粒子、原子、分子、そして原初の物質である水や空気や土が生じたのである。創世記の「光があった」という聖句は現代科学のいうビッグバンに相当し、創造神話のいう原初の物質は創世記の「光」に相当するといえよう。

現代の物理学では、原初の物質はエネルギーであり、エネルギーより光、素粒子、原子、分子が現れ、さらに水や土や空気が現れたのである。しかしながら、自然科学が発達していなかった古代の神話においては、水や土を原初の物質と見るほかなかったのである。現代物理学から見た原初の物質（エネルギー）と古代の創造神話の見た原初の物質（水や土など）を合わせて表現すれば図３のようになる。

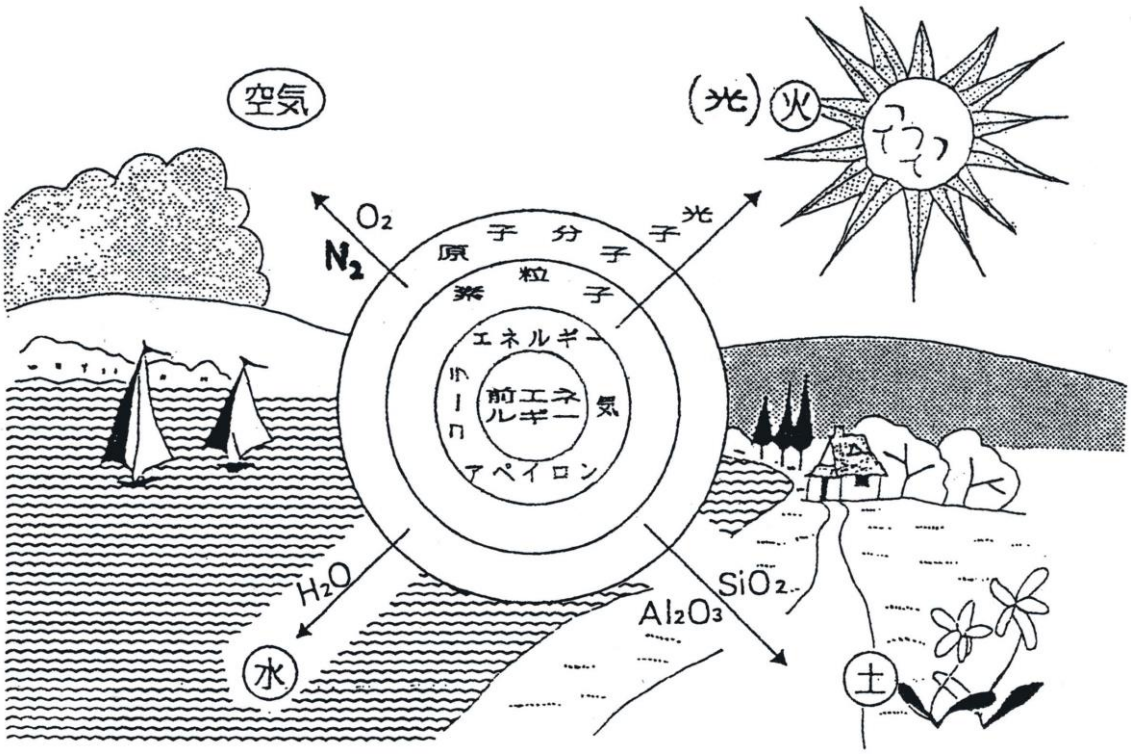

図３．現代物理学と古代神話の見る原初の物質

註

(1) C. Scott Littleton, general editor, *Mythology* (San Diego: Thunder Bay Press, 2002), 330-331.
(2) Ibid, 392-395.
(3) Ibid, 278.
(4) 実際、*The Interpreter's Bible* (New York: Abingdon Press, 1952)には次のように記されている。
It must be noted, however, that this verse stands apart from the rest of the chapter in that (a) it represents the Spirit of God, not the uttered word, as the agent of creation; and (b) the reference to the Spirit "brooding upon". . . the chaos has underlying it the idea of a cosmic egg which was hatched by the brooding Spirit, as by a bird, to produce the universe, an idea which is foreign to the story as a whole (vol.1, 466-67).
(5) D.A.リーミング、M.A.リーミング、松浦俊輔他訳『創造神話の事典』青土社、1998年、50-52頁。
(6) 同上、208頁。
(7) C. S. Littleton, general editor, *Mythology*, 137.
(8) Ibid., 16, 30.
(9) D. A. リーミング、M. A. リーミング『創造神話の事典』290頁。
(10) 同上、256頁。『日本書紀』(日本古典大学体系) 岩波書店から引用。
(11) C. S. Littleton, general editor, *Mythology*, 335.
(12) 宮坂清通他『おんばしら――諏訪大社御柱祭のすべて』信州・市民新聞グループ、2003年、239頁。
(13) 鳥居礼「日本文化の基軸に求道精神」世界日報、2007年7月28日。
(14) D. A. リーミング、M. A. リーミング『創造神話の事典』335-336頁。
(15) 同上、294-295頁。
(16) 同上、186頁。

参考文献

Littleton, C. Scott, general editor, *Mythology*. San Diego: Thunder Bay Press, 2002.

Leeming, D. Adams with Leeming M. Adams, *Encyclopedia of Creation Myths*. Denver: ABC-CLIO, 1994. D.リーミング、M.リーミング、松浦俊輔他訳『創造神話の事典』青土社、1998 年。

Nolan B. Harmon, editor, *The Interpreter's Bible*. 12vols. New York: Abingdon Press, 1952－57.

松村一男監修『世界の神々の事典』学習研究社、2004 年。

福士斉・佐々木勝編集『ヒンドゥー教の本』学習研究社、1995 年。

後藤然他編『神道の本』学習研究社、1992 年。

大林太良編『世界の神話』NHK ブックス、1976 年。

吉田敦彦『天地創造 99 の謎』産報、1976 年。

リチャード・ウォーダーストーン著、阿部慈園監修、藤沢邦子訳『インドの神々』創元社、1997 年。

荒川紘『東と西の宇宙観・東洋編』紀伊国屋書店、2005 年。

荒川紘『東と西の宇宙観・西洋編』紀伊国屋書店、2005 年。

鳥越憲三郎『古代朝鮮と倭族』中央公論社、中央新書、1992 年。

金両基『物語韓国史』中央公論社、中央新書、1989 年。

宮坂清通他『おんばしら――諏訪大社御柱祭のすべて』信州・市民新聞グループ、2003 年。